

自閉症スペクトラム障害をもつ女性の ライフサイクルと発達

福 島 鈴 子[†]

I 問題と目的

成人期女性の自閉症スペクトラム障害

成人期の ASD への理解がまだまだ不十分な現状があるが、なかでも女性の ASD にその傾向が強いと考える。診断基準も男性基準になっており、女性の ASD の人たちは、その診断基準にもれてしまい、発達障害ではないと診断され、そのまま成人期に達していることが少なくないと考える。支援をうけることがなく、二次障害で訪れた精神科で時間をかけて、発達障害と診断されるケースも多い。しかし、女性の場合、発達にまつわる情緒的なもの、体調的なもの等や女性特有の人間関係等が、心の理論の獲得に困難を示す当事者にとって、大きな問題となってくるのではないであろうか。

これまで男性に多いと言われてきた ASD であるが、近年では「女性のアスペルガー症候群」などの書籍も出版されており、その中でも「みなさんが知っていることはじつはほとんどが男性のアスペルガー症候群の情報です。女性の場合は悩み事に対応法も男性と異なるのですが、それはあまり知られていません」¹⁾と宮尾 (2015) が主張するように、男性と女性ではその困りごとや特性が異なると言われている。また神尾 (2012) が、「高機能 ASD 女性の自閉症状は、幼児期には男児同様はっきりしているが、成長と

ともに目立たなくなる (本人が意識的にカムフラージュしている側面もある)」²⁾と指摘しているように、「困難さをカムフラージュ」しながら生きているということも考えられる。本研究では、成人の ASD のある女性が歩んできた人生を知ること、幼少期や思春期の困りごとや特徴を明らかにし、周囲の人間はどのように受け入れ、接していけばよいのかを明らかにしたい。

なお、ASD に関する研究の多くは質問紙調査など量的研究法によって行われている。本研究では、女性当事者の語りから、質的な分析を実施する。

II 方法と対象

成人女性の自閉症スペクトラム障害である当事者 3 名に半構造化インタビューを実施した。本研究に協力をいただくことを事前に説明し、同意書に署名を行った。またその際、面接のフィードバックについて、希望有無を確認し、それぞれの個人情報の保護の観点から、研究の趣旨が変わらない範囲でのデータの一部に改変を加えた。面接は 2017 年 10 月から 2018 年 9 月にかけて、一人に付き約 2 時間から 4 時間程度行い、インタビューは I C レコーダーに録音された。対象者 A、B、C のそれぞれのプロフィールを表. 1 に示す。

表. 1 インタビュー対象者のプロフィール

	性別	年齢	学歴	職歴	雇用形態	診断名
A	女性	50歳	公立高校卒業	障害者施設洗濯係	障害者雇用	アスペルガー症候群
B	女性	46歳	国立大学院修了	教育関係	健常者雇用	アスペルガー症候群
C	女性	59歳	専門学校卒業	介護職員(元保育士)	健常者雇用	特定不能発達障害 (ASD傾向あり)

[†] 大学院教育学研究科 学校教育専攻 障害児教育
担当教員：白石恵理子

対象者Bは現在の職業の詳細を記載しないという条件のもとにインタビューを実施した。対象者Cは、約20年前に大学病院で「特定不能発達障害」と診断されているが、医師の見解から「自閉症スペクトラム障害の傾向も含んでいる」と指摘されており、筆者がインタビューを実施した結果、自閉症スペクトラム障害の傾向があるとして、対象者に含むことにした。インタビューを分析する方法としてKJ法を採用した。KJ法は川喜多二郎氏が発案した「発想法」であり、現場調査で得られたさまざまなデータをまとめ概念化し、問題点を整理することができるという特徴をもつ。インタビュー項目は(1)誕生から幼少期について、(2)困りごと、その時の感情、(3)母親との関係、(4)成人期の仕事、人間関係、恋愛、(5)診断を受けたときの心情であった。

Aの語りからの成育歴の概略

(1)幼少期

対象者A(1968年生 40歳でASDの診断を受ける)は3人姉妹の長女として生まれた。幼少期は幼稚園に入園するまで普通の子供とも思われていたが、入園後幼稚園の教員から「ほかの子供とも違うのではないか」と指摘を受けるようになる。幼稚園でも友達と遊ぼうとせず、気に入った動物のおもちゃをいくつも箱に入れ、そればかりで遊んでいた。集団行動ができず、気になることがあると集団から外れ、怒られると激しく泣き出すこともあった。幼稚園で知能検査を受けたが、知的に遅れはないが情緒面での著しい遅れが見られるという結果であった。

(2)小学校

小学校に進学と同時に、担任から障害児学級(現在の特別支援学級)に入るように勧められる。ここで二度目の知能検査を受ける。その結果当時7歳のAは、知能は正常で情緒面が4歳程度であった。担任教師は、障害児学級に入ることを勧めたが、母親が承諾することもなく、普通学級での就学を継続した。Aは学校で友達関係を築くことはなかったが、そのことを特に悲しいと感じることなく過ごした。

(3)中学校・高等学校

地元の中学校と高等学校に進学する。友達関係を築くことができないことや、クラブ活動に

参加できないなどの問題はあったが、比較的落ち着いており数少ない友人もいた。Aは卒業後の進路として就職を希望するがうまくいかず、事務職に就きたいという希望があり、卒業後は近隣の職業訓練校に入学し1年間経理を学んだ。

(4)就職・成人期

地元の小規模な会社に入社する。パソコンの使い方がわからず叩いて破損させ、短期間で解雇される。その後、スーパーマーケットに縁故採用され、バックヤードで食品の品出しの準備業務をする。ここでも人間関係は学生時代と変わることはなく、周囲とうまく合わせることができず、数々のトラブルを起こし短期間で退職することになった。その後、ゴルフ場でキャディーの仕事に就く。そこでは従業員が日系ブラジル人と日系ペルー人で人間関係は良好であったため7年間就労することができた。退職後はメキシコに渡り4年間ワーキングビザで滞在した。

(5)診断から現在

メキシコから帰国後Aは鍼灸師の資格を取得する。資格を使って仕事をすることを希望したが、面接で一方向的に話してしまい、面接を中断されてしまう。何度も面接を受けるが、うまくいかずうつ気味になってしまい精神科を受診する。そこで発達障害の疑いがあると言われ、専門医を探し何件も病院をまわりようやくたどり着いた病院で、40歳のときに「アスペルガー症候群」と診断され、障害者手帳を取得し、現在は重度心身障害者施設で、入所者の衣類を洗濯し仕分けをする仕事に就いている。

Bの語りからの成育歴の概略

(1)幼少期

対象者B(1972年生 38歳でASDの診断を受ける)は3人兄弟の末っ子として生まれた。Bは兄弟の中でも歩き始めと言葉の話し始めが早かった。幼稚園では給食で特定の食べ物が食べられないことや昼寝ができないということがあり、休みがちであったが、異性の友達と戦隊ものごっこやヒーローものごっこをして遊ぶのが好きだった。

(2)小学校

小学校に入学するまでは「早く学校に行きたい」と話していたが、学校が始まると疲労が酷く休みがちになる。給食の中の特定の献立が食

べられないことや宿題ができないなどの問題はあったが、成績には問題がなく、少数の友達もできた。

(3)中学校・高等学校

中学校に進学する。そこでBは目立つということが原因でいじめにあった。1学期はなんとか休みながらも登校したが、クラブ活動と宿題による疲労感がひどく、2学期からは不登校気味になる。担任から発達支援センターに行くように勧められ、そこで知能検査を受ける。結果は、知能は平均以上であり問題がなかった。やがて高校受験を迎えるが、不登校が原因で高校を受験させてもらえなかった。唯一、県下の私立女子高だけが、受験を許可してくれた。高校生活では女子同士のグループに入れない、クラブ活動が苦痛などの問題もあったが、少数の友達もできた。英語が好きだったので大学への進学を希望したが、両親の反対で大学に進学することを諦めてから意気消沈し、次第に学校に行かなくなり休学の後に自主退学した。

(4)就職・成人期

Bは通訳になる夢への思いが諦めきれなかった。しかし、高校を卒業していないため専門学校や大学への進学はできなかった。Bは通訳の夢を諦め、希望の職種ではなかったが、当時学歴は問われなかった化粧品メーカーに就職した。ここでは人間関係で困難を極めることがあり、また店舗の撤退などもあり会社を変わることもあったが十数年続いた。メーカーでの業績を買われて、大手企業に就職するが、ここでも人間関係のつまずきと疲労のため職場で倒れて退職するに至った。その後、2年間の休養期間を経て、福祉の仕事に就いた。

(5)診断から現在

企業を退職後、2年間の休養期間を経て契約社員として福祉機関に勤めた。当時うつ病と診断されていたが「自分は人とは何かが違う」という疑問をもっており、数か月待って発達外来を受診する。38歳の時にアスペルガー症候群の傾向ありと診断される。心理検査の結果から「大学に進学し、専門的な職業に就くように」と指導をうけた。その後、Bは高校編入を経て大学に進学し、大学院を修了し、現在は教育関係で心理職に就いている。

Cの語りからの成育歴の概略

(1)幼少期

対象者C(1959年生 45歳で特定不能の発達障害の診断を受ける)は2人姉弟の長女として難産で生まれた。幼少期は体をあまり動かさず、鳥小屋の前で座って鳥を見つめている子だった。みんなで遊ぶこともなく、草花が好きで1人で過ごすことが多かった。

(2)小学校

小学校に進学すると、靴を反対向きに履いていたことや、左と右がわからないこともあった。ぼんやりした感じの子どもで、成績は振るわなかった。忘れ物が頻繁にあり、整理整頓ができなかった。鼻炎のため常に鼻水がでていることや、食べられない給食のパンを引き出しにしまいこみカビを発生させることがあり、汚いといじめられるようになる。特に学習面では数学が苦手であった。

(3)中学校・高等学校

Cは母親と祖父母の勧めで母親の母校であった女子校を受験し入学する。Cは、強い女子グループから度々いじめを受けるようになるが、学校は休まず登校した。学校生活では心身ともにしんどくて集団行動が辛く、他者からの視線も怖かった。高校は内部進学する。高校生活では成績は振るわなかった。3年の時に再びいじめにあう。進路は美術が好きだったので美大進学を希望したが、担任から保育専門学校に進学するように指導され、高校の系列の保育専門学校へ進学する。

(4)就職・成人期

専門学校卒業後は乳児院に就職する。一度に複数のことができないことや指示が理解できないことがあり、コミュニケーションによる困難で困ることが多かった。女性職員からのいじめを受けるが、8年間勤め上げ、結婚退職する。

(5)診断から現在

Cが診断に至ったのは、息子の一人がASDであったためである。息子の通う発達支援センター職員から「お母さん(C)もASDの傾向があるのではないか」と指摘され、近隣の大学病院で検査を受け、45歳の時に「特定不能の発達障害」と診断される。特定不能ではあるがASDの傾向も強くADHDの傾向もあると医師から

告げられた。診断されても何かが変わるということではなかったが、不登校やいじめで苦しんでいる子どもたちや困っている人たちに何かできることはないかと考え、障害者施設で介護職員として8年勤務した。

Ⅲ対象者のインタビューの結果と考察

(1) 幼少期の特徴と困りごと

質問項目1についての語りから抽出されたラベルは10個であり、コードが3個、上位コードが2個、カテゴリーが1個となった。それぞれの名称とラベルの例を以下の表、2に示した。

表. 2【幼少期の特徴と困りごと】

カテゴリー	上位コード	コード	ラベルの例
幼少期の特徴	幼稚園入園前	発達の状態	普通の発育で特におかしいところが見られるということはなかった (A)
			一般の子どもより言葉を話すこと 歩くことが早かった (B)
			体を動かさない子 鳥が好きでぼーっと一日中眺めていることが多かった(C)
	幼稚園入園後	行動	幼稚園で集団行動ができず、一人であることが多かった 児童同士かかわりを 持とうとせず、職員室にいたことが多かった (A)
			大人のような言葉使いで話す 話し方が子どもらしくないと言われる 昼寝が できない 給食を食べるのが遅い (B)
			行動が遅い、やることなすことすべて時間がかかる ぼーっとして人と 遊ばない (C)
		好きなもの	地球とか宇宙とか地層とかが好きで図鑑を見るのが好き (A)
			本が好きで図鑑や百科事典 電話帳や人名事典、市外局番、郵便番号が好き で一日中本をみていることがあった (B)
			小鳥や草花が好きで頭の中でずっと花や小鳥について考えるのが好き (C)

分析の結果、「発育の状態」「行動」「好きなもの」から幼少期の特徴を見ることができる。3名の共通点としては、幼稚園で友達関係を築こうとせず、一人で過ごすことが多かった。また何かに興味を示すとそのことに熱中する傾向が見られた。Aは特に一人が寂しいと感じることがなく、友達と遊ぶことはほぼなかった。BとCについても、一人で遊ぶことが多かった。ICD-10のアスペルガー症候群の診断基準によると「互いの興味・活動・感情を共有するような友達の関係を、(十分な機会があっても、知的な発達年齢に見合ったやり方で) 発展させることができない。」³⁾とあるように、A、B、Cのいずれも友達関係を築こうとせず、何かを共有しようとしたことがないようであり、自分の世界にこもるような遊びをしていたことがわかった。

(2) 学校生活の中での他者との関わりと困りごとと勉強について

質問項目2では、インタビューから明らかになったことを「学校生活の中での困りごと」として5つに分けた。ここでは「他者との関わりから生じた困りごとと勉強について」を下の表に示す。

①「集団の中での自分」

学校生活の中での困りごとは「集団の中での自分」「勉強に関すること」「友達との関わり」「いじめ」「出席状態」「教師との関わり」に分けられた。以下、それぞれについて分析した。

「集団の中での自分」でAは「集団の中での自分について考えることがなかった」と語り、Bはクラブ活動や集団で競技するスポーツの「チームワーク」について理解ができず、単独行動にでて周囲を困らせるといったことがあった。Cも班で行動することができず、班の仲間から注意されるが、聴覚的に聞こえていてもその言葉が頭に入ってこないということがあった。Bは特にクラブ活動と集団行動を伴うことや、仲間と嬉しい感情や悲しい感情を共有することが困難に感じていたようだった。Cも班での行動ができなかった。班の仲間の一人に「忘れ物で班の仲間に迷惑をかけている」と言われても、聴覚的に耳には入ってきてても自分の心までは入ってこないと言った。これは周囲からすると「人の話を理解できない」として認識されてしまうのではないかと考えられる。

表. 3 【学校生活の中での他者との関わりと困りごとと勉強について】

カテゴリー	上位コード	コード	ラベルの例
学校生活(1)	小学校・中学校での 困りごと	集団の中の自分	集団の中での自分の存在について考えることがない <u>ピンとこない</u> <u>妹の友達が遊ぶのと同じに入ろうとせず一人で遊ぶ。</u> (A) <u>席替えが苦手で後ろに人がいると落ち着かない 慣れたところに席が変わること</u> <u>へのストレス 見える景色が変わると落ち着かない</u> (B) <u>クラブ活動がづらい 授業が終わってからのクラブ活動に体力がついていかな</u> <u>い チームワークが理解出来ない</u> (B) <u>班で行動することに合わせられず、忘れ物が多い</u> (C) <u>忘れ物が多く、班が同じ生徒から優しく注意されが聴覚的に聞こえていても頭</u> <u>の中に入っていない 整理整頓ができない</u> (C)
		勉強に関すること	勉強は嫌い <u>あんまり好きになれない 図鑑とか漫画は好きだけど難しい本は</u> <u>好きではない</u> (A) <u>全体的に成績は良く特に困ったことはなかったが、宿題が出来ない 勉強は</u> <u>学校でするものという認識がありどうしてもできなかった</u> (B) <u>理系が特に苦手で図形とかの意味が解らない 勉強全般が苦手だった</u> <u>成績はずっと悪かったと思う</u> (C)
学校生活(2)	対人	友達との関わり	<u>一人でも寂しいとか感じたことがない ピンと来ない 友達ができないという</u> <u>気にしたことはない</u> (A) <u>障害のある子や国籍の違う子は自分と同じようにいじめられたり、仲間はずれ</u> <u>にされていたから関わることができた</u> (A) <u>友達ができて、やがては離れていった「登校拒否の子と仲良くするな」と</u> <u>保護者から言われて友達がいなくなる</u> (B) <u>どのように友達と関わっていいかわからず、自分の意見もいえず言いなりにな</u> <u>る</u> (B) <u>人気の生徒の身振り手振りを真似て好かれようと頑張る</u> (B) <u>友達は少ないながらもいた</u> (C)
		いじめ	<u>なぜ自分がいじめられるのかわからない ピンとこない</u> (A) <u>社会の本を隠されるが机をひっくり返し、靴を叩いて対抗する</u> (A) <u>仲間はすれにされる 女の子の輪に入られない 無視されたり「ずる休み」など</u> <u>罵倒され陰口を言われる</u> (B) <u>髪を毛を引っ張られ固まって髪が抜ける</u> (B) <u>休み時間に「汚い、ハイキーンが移る」と言われ持ち物を隠され、暴力を振るわれ</u> <u>る</u> (C)
学校生活(3)	日常	出席状態	<u>いじめられても学校へ行く 自分はなにも悪いことしていないから学校を休む</u> <u>こともない</u> (A) <u>上級生からのいじめやクラブ活動でもいじめや仲間はずれがあり学校へ行か</u> <u>なくなる</u> (B) <u>担任教師からの登校への促しが苦痛 働きかけも苦痛で徐々に追いつめられる</u> <u>(B)</u> <u>当時は不登校なんてない時代だったので学校を休むなんて考えられなかった</u> <u>(C)</u>
		教師との関わり	<u>先生は暴れるとか騒ぐとかしてアピールしないといじめがあることに気が付かな</u> <u>い おとなしくしていたら何も気にかけてもらえない</u> (A) <u>「なぜ学校に来ないのか」「なぜ友達を作らないのか」と言われる 宿題ができ</u> <u>ないので姉妹に手伝ってもらうがそのことで担任から叱責される</u> (B) <u>「学校に来れないのは自分(B)が弱いからだと言われ傷つく</u> (B) <u>中学二年生の時に新しい担任から「交換ノート」をしようと言われる やがて</u> <u>ノートの返事が欲しくて登校するようになる</u> (B) <u>先生は何もみていない 誰がいじめっ子でいじめられっ子が誰かもわかっていな</u> <u>い</u> (C)
学校生活(4)	対人	教師との関わり	<u>小学6年生の時の先生が体の一部のことについていじめられた経験があったのでい</u> <u>じめていた生徒を一喝し、救われた気持ちになった</u> (C)

② 「勉強に関すること」

ここでは勉強に関して生じた困りごとを分析した。A は勉強に関して「あまり好きではない」「図鑑は好きだけど難しい本は嫌い」と語った。B は勉強が嫌いではなかったようだ。成績も良く特に困ったことはなかったが宿題が一切できなかった。C は「全体的に勉強が苦手だった。特に理数系が苦手で図形などはさっぱり理解できなかった」と語る。A と C は「勉強が好きではなかった」「あまりできなかった」と語った。A と C の学業がふるわなかったのは、当時の環境では ASD への配慮がなかったからではないのではないだろうか。この当時に現在のような配慮が

あれば結果が違うことになっていたことも考えられる。「B は学校が好きではなかったが勉強が嫌いではなかった。当時は理数系と英語が好きだったようだ。また、B は学校では、共感性や共同性を求められることに苦痛を感じ、ペアワークやグループワークで強い疲労感を覚え、次の授業は眠ってしまうということもあったようである。C は「とにかく成績が悪かった」ということを何度も強調して語っており、勉強をすることが困難だったことを語った。体育に関しては A と C は苦手でも B は短距離競争や一人で競技するものに関しては得意で、グループで競技するものに関しては苦手であったようである。

③「友達との関わり」

Aは学校で、一人でいることに関して何も感じる事がなかった。アスペルガー症候群の女性の悩みとして、女性同士の会話についていけないということがある。その原因は基本的に「マイペースで他人の言動に興味がないことと自分の興味関心ごとについては話すことができるがほかのおしゃべりに関してはスキルが低い。」⁴⁾ためだと指摘されている。この傾向はA、B、C、3名ともに表れている。Bはそのことが原因で友達関係を継続させることが難しかったと語り、AとCに関してもインタビューの際に一方向的に、話を本題から脱線させながら長時間話す傾向が見られた。Bはインタビューの際には淡々と一点を見つめ本を読んでいるように話した。

④「いじめ」

A、B、Cの3名ともにいじめを受けている。Aは小学校の頃、Bは小学校、中学校といじめを受け、Cも小学校から高校に至るまで長期間のいじめを受けた。Aはいじめを受けたことに對して、「自分がいじめられる意味が解らないし、いじめられておとなしくしていると（相手が）つけあがるから、こちらが反撃できることを示さないといけない」と主張した。Bは些細なことが気になり、Bの言動から友達関係に問題が起こることが多々あった。同級生が授業中にずるいこと（答をカンニング）をすることや、勉強が嫌いな態度をとる子のことがどうしても許せないと指摘し、トラブルになることもあった。Cはいじめの原因として、「鼻炎でいつも鼻をすすっていたから汚いといわれた」と語った。思春期の子どもは敏感である。人と少し違うASDやその傾向がある子どもに違和感を覚えたのかもしれない。またBのように空気が読めないことで、級友に「言わなくていい一言」を言ってしまったり、友達の気持ちを配慮しない行動をしてしまったりでトラブルに発展してしまうこともあった。

⑤「出席状態」

不登校に関してはBのみに見られた兆候であった。この時期にBは母親から心理的と身体的な虐待を受けている。家庭環境もBの心身の健康状態に影響を与えていた。当時はとにかく

「消えてしまいたい」という気持ちが強かったと語った。この時期に不登校だったことは、のちのBの生活に大きな影響を与えた。成人してからでも地元では「あの学校行かなかった子」と噂され、それはごく最近まで言われ続けていたと語った。「やり直そう、やり直そうと思っても一度ルールから外れたり、つまずいたりすると、自分がどんなに頑張っても周囲が許さないというか、受け入れようとしない」と強く感じる事があったと語った。AとCは不登校にならなかった理由として、Aには祖父母の存在があり、Cは家庭環境が良好であったことがあると考えられる。Aは「おばあちゃん、おじいちゃんは優しくしたし、何をしても許してくれた」と語り、Cは「家が大好きだった。お母さんも大好きだった」と語った。

⑥「教師との関わり」

教師との関わりは良好ではなかった。教師の理解がないと感じることがA、B、Cの3名ともにあった。しかし、すべての教員が、理解がなかったわけではなかった。歩み寄ろうと試みた教師もいた。Bについては、中学2年生の時の担任が理解を示してくれ、「心のノート」を渡してくれた。書くことが好きだったBは自分のことをたくさん書いてコミュニケーションを取った。またその担任はBを責めなかった。「先生はいろんなことで私を責めなかったし、私の話を聞いてくれたし、決めつけず、私を知ろうとしてくれた」と語る。そこからBは学校に登校しはじめ友達もでき始め、いじめなどもなくなっていった。Cも、いじめを注意してクラスの問題として取り上げ、解決しようと試みた教師がいた。しかし、いじめが完全になることは難しかった。

(3) 高校進学と将来の夢

高校に進学してからの困りごとと当時の将来の夢を分析した。抽出されたのは、カテゴリーが1で、上位コードが2、コードが2で、ラベルの例が16であった。詳細を以下の表、4に示す。

進路については各々の希望が芽生えてきた。Aは高校で友達をつくるといったこともなく、3年間過ごした。祖父母の他界が相次ぎ、母親の心理的な部分に余裕ができて、Aと母親の関係

性は改善が見られた。Bは高校1年の2学期から学校に行かなくなる。もともと志望校でもなかったこともあったが、周囲の環境になじめなかったことや、進路に関しても何をやっても諦めなければならない環境で、すっかりやる気をなくしてしまったようであった。

Cは高校1年と2年は何もなく平穩に過ごしてきたが、3年生でいじめにあってしまう。なぜいじめられたかという問いには「成績が悪くておとなしかったからだ」とCは答えた。

(4) 社会に出てからの困りごと

社会に出てからの回答は、カテゴリー1、上

位コードが1、コードが4、ラベルの例が27個であった。困りごととして「コミュニケーション」「業務」「人間関係」「職場で起きた困難」が抽出された。詳細を表5に示す。

ここでもコミュニケーションの問題が見られた。Aは上司から言われたことが理解できず、面接で一方向的に話してしまい面接を中断されることや、パソコンの使い方が解らず、たいて壊してしまうなどトラブルがあった。

Bは「みんなで頑張ろう」の意味を頭では理解しておりながら、本当の意味が理解できず単独行動にできることが多かった。Bは業績が良く

表4【高校進学と将来の夢】

カテゴリー	上位コード	コード	ラベルの例
学校生活(5)	高校生活	進学してから困りごと	<p>地元の公立高校へ進学したが友達はいなかった (A)</p> <p>不登校だったため中学の内申書は良くなく出席日数の問題もあり希望の進学先を受験させてもらえなかった (B)</p> <p>進学先の女子高は授業中が騒がしくて集中できない (B)</p> <p>周囲の生徒の会話についていけない (B)</p> <p>1年の夏休み終了後疲れが溜まって学校に行けない (B)</p> <p>授業が物足りなく面白くないが真面目な友達は少数いた (B)</p> <p>内部進学する 外部からの入学者がいたので少し環境がよくなる (C)</p> <p>先生のいないところでいじめられる 目に針を刺されそうになる (C)</p> <p>成績が悪いしおとなしいからいじめられる (C)</p>
	芽生えた夢	将来の夢	<p>社会が好きだったので社会科の教員になりたかったが勉強が好きではないので諦めた (A)</p> <p>事務の仕事(OL)に憧れる (A)</p> <p>大学に進学したいと思う 高校の英語の教師から進学を勧められる (B)</p> <p>英語が好きで通訳や英語に関する仕事がしたいと思うようになる (B)</p> <p>絵を描くのが好きなので美大に行きたいと思うが教師からそこの才能がないと言われ断念する (C)</p> <p>高校の系列の保育専門学校への進学を勧められる (C)</p>

表5【社会にでてからの困りごと】

カテゴリー	上位コード	コード	ラベルの例
仕事	困りごと	コミュニケーション	<p>上司や同僚と言葉による意思疎通ができない (A)</p> <p>面接で一方向的にしゃべりすぎて次につながらない (A)</p> <p>人間関係がうまくいかない (B)</p> <p>「みんなで協力して頑張ろう」の意味が理解できず単独行動をしてしまいトラブルを起してしまう (B)</p> <p>人と一緒に昼食を食べるのが苦痛 (B)</p> <p>人の話を聞いても耳には聞こえるが内容が理解できない (C)</p>
		業務	<p>パソコンの使い方が解らず叩いて壊してしまう (A)</p> <p>状況変化についていけない (A)</p> <p>業績面では良好で数多くの表彰を受けている 部門の代表にも選ばれている (B)</p> <p>れ部門の責任者になる (B)</p> <p>商品の片づけができない ストック整理に時間がかかる (B)</p> <p>状況変化には何とか対応するが疲労感がひどく発熱があった (B)</p> <p>ミスが多い (C)</p> <p>状況変化についていけない (C)</p>
		人間関係	<p>人間関係を構築することが困難 一方向的に話すことが原因だと思われる (A)</p> <p>グループの中で単独行動をとることが多く浮いた存在となる (B)</p> <p>仲間に入る努力をするが頑張りが過ぎて体力を消耗し仕事を休むことが多く体が弱い人を思われていた (B)</p> <p>資格のない年配女性からのいじめが続いた (C)</p>
		職場で起きた困難	<p>職場が暑くてつらい イライラする (A)</p> <p>騒がしいのが苦手 (A)</p> <p>汗をたくさんかく 体を血が出るまでかきむしってしまう (A)</p> <p>体が疲れていてもしんどいことを認識できない (B)</p> <p>ストレスで体に蕁麻疹がでて血がでるまでかきむしってしまう (B)</p> <p>多忙で不眠症になり過呼吸を起してしまう 休職の取り方がわからない (B)</p> <p>顔面が半分動かなくなる (B)</p> <p>人に言われていることが理解できない (C)</p> <p>ずっと緊張している状態 (C)</p> <p>他者と目を合わせることが恐怖でできない (C)</p> <p>ずっと緊張している状態 (C)</p>

会社での評判は良かったが、身近な職場仲間の間で評判は良くなかった。これではいけないと努力をしたが、体力を消耗するばかりで会社を休むことが増えた。Cはミスが多く、職場でもうまくいっているとは言えない状態だった。また状況変化に弱い傾向もみられた。「先の見通しを立て、それに合わせて柔軟に行動することが苦手である」⁵⁾とあるように、Cも状況変化に対応できず困ったようである。Aの「上司の言っていることが理解できない」や、Bの「単独行動にでてしまう」ということは、「場の雰囲気、

相手の意図や感情を読み取ることが難しい」⁶⁾ことがあてはまる。ASDの特性が問題で就職してから、「コミュニケーションの問題」と「場の空気が読めない」など学校生活と同様の困難さが見られた。

(5) 障害が関係していると思われる恋愛と感情

それぞれが経験してきた恋愛や結婚に関する感情からは、カテゴリーが1、上位コードが2、コードが2、ラベルの例は14個抽出された。「感情」と「理想と現実」を詳細に表. 6に示す。

表. 6【障害が影響していると考えられる感情と恋愛】

カテゴリー	上位コード	コード	ラベルの例
障害に関係すること	感情	感情表現	嬉しいとか悲しいとかあまりわからないし一人で寂しいと感じたことがない (A)
			人の感情が理解できない 好きとか嫌いとか両極端な感情しか理解できない(B)
			何か悪いことが起こるとすべて自分のせいだと感じてしまう (B)
恋愛と結婚	願望と現実	それぞれの歴史	自分は完璧ではなくてこぼこなOでほかの人はきれいなOだと感じる (B)
			20代のときに結婚相談所に入る 一度お見合いをするが1回目の紹介で遊園地ではしゃぎすぎてしまいこれ以上は紹介できないと退会させられる (A)
			50歳になったらシニア婚活がしたい 理想の相手は公務員が研究者 (A)
			結婚願望がない (B)
			異性に付き合いを申し込まれると断れず交際を続けてしまう (B)
			異性を好きにはなるが相手の好意が重く感じてしまい逃げ出したくなる (B)
			好意を持たれると受け入れなければならない、拒否してはいけないと思う (B)
			結婚願望が強かった (C)
			両親にお見合いを勧められ15回お見合いをするが自らの意思で参加した婚活パーティーの方が楽しかった (C)
			趣味の旅行の集まりで知り合った男性と結婚 (C)

AとCは青年期から結婚願望があり、結婚相談所に登録したり、お見合いパーティーに参加したり、お見合いをしている。Bは結婚願望がなかった。Aはこれから先の経済的な不安があり、安定した職業の男性と結婚したいと切実に語った。ここではBが女性のアスペルガー症候群の特徴が如実に表れている。恋愛感情がわからないことをはじめ、「自信喪失しているときに、ほめてくれる男性がいると頼りにしがち」⁷⁾また「男性に誤解されやすい、どんな服装や行動が異性を誘うサインになっているかよくわかっていない。何気なく異性に触れ、好意だと誤解されたりする」⁸⁾との見解があるように、Bはこれまで、異性からのセクシャルハラスメントやストーカー被害にも逢っている。Cはその点では特に困ったことはなかったようである。Cの周囲も「早く結婚しなさい」と早くからお見合いを勧めていたのでCにとっても結婚することはごく自然なことであったようだ。

(6) 診断と診断が人生に与えた影響

診断に至った経緯と診断が与えた影響について、カテゴリーが1、上位コードが2、コードが4、ラベルの例が12抽出された。表. 7に詳細を示す。

A、B、Cともに「診断はされたが、これとって何かが変わったわけでもない」と語った。この3名の中では、Aのみが福祉の支援を受けている。「診断がもたらした変化」として、Bは「人生をやり直そう」と思い学校に編入した。Cは「自分のように困っている子どもたちを助きたい」と当事者の会「P」を立ち上げる。Aは、支援に対して不満を漏らした。またBは「支援も相談するところもないし、自分でどうにかした方がましって思っただけで勉強しました」と語った。Cも「精神科だけにはかかりたくない」「問題が解決しないのに薬ばかりだから」と支援はうけていない。しかし、Aは診断を受けたことにより、自分自身を理解できるようになったということや、母親が理解を示して

くれ、関係性がよくなったことなどプラスの面もあった。Bは学校に行こうと決心し現在に至る。Cも「もっと困っている子どもたちの役に立ちたい」と精力的に活動をしている。このことから診断されたということがマイナス面ばかりでなくこの3名については、プラスの方向に向いた事柄もあった。

(7) 母親との関係

インタビューの中で家族について語られたのは主に母親についてであった。家族関係について、AとBは父親と姉弟についてあまり語ることはなかった。Cは父親、弟、母親、祖母について語ったが特に母親のことは語ることが多かった。カテゴリが1、上位コードが3、コードが4、ラベルの例が13であった。詳細を表. 8に示す。

AとBは母親から虐待を受けており、特にB

は長期にわたって心理的、身体的な虐待を受けている。Cは虐待を受けることはなかったが母親の過干渉に辟易し、母親と距離をおいていた経緯がある。この3名に共通していたのは、母親との距離が密接であることと、何かを決めるときに必ず母親の意見が重視されており、3名とも自分の意思を持てなかった時期があったことである。AとCが診断を受けたときに、双方の母親に対して医師側からのコメントはなかったが、Bの母親については、母親との会話や聞き取りから何らかの発達障害の可能性があるとコメントがあった。両親が発達障害であると、子育ての問題が出てくることや、そのことが当事者の人生に大きく影響してしまうことも考えられる。Bは数年前にようやく親離れができ、精神的にも自立し、社会生活をおくる中で人間関係が改善された。Aは海外に行った時も、自分

表. 7 【診断と診断が人生に与えた影響】

カテゴリ	上位コード	コード	ラベルの例
障害	診断	なぜ診断に至ったか	テレビでアスペルガー症候群という特集を見て母親から自分(A)がそうではないかと指摘を受け受診に至る (A)
			勤務先の専門職の人から「アスペルガー症候群ではないか」と指摘され受診に至る (B)
			息子が重度の自閉症で発達支援センターの職員から「お母さん(C)もそうではないか」と指摘を受け受診に至る (A)
			診断されたときの気持ち 診断されても解決策がない (A)
			診断されたとしても何がかわることでもない (B)
			診断されたとしても何がかわることでもない (C)
		診断がもたらした変化	診断によって自分自身がわかるようになった (A)
			人生をやり直そうと思い学校に通いだす (B)
			困っている子どもたちや当事者の力になりたいと思い当事者会を立ち上げる (C)
			スピリチュアルの視点ではアスペルガーは選ばれた人たちだと思う (A)
良いところ	ASDについて		同じ考えの人ばかりだけでなくアスペルガーみたいな考え方は必要だと思う (A)
			記憶力がいいこと、長時間集中できること、頭の中に沢山の引き出しがあってそこから情報を随時だせることとか、冷静なところとかいいこともある (B)

表. 8 【母親との関係】

カテゴリ	上位コード	コード	ラベルの例
人間関係	母親との関わり	母親からの叱責	母親に「なんでこの子は」という思いから叩かれる (A)
			「余計な一言、いらぬことを言う」とつねられる (A)
			母親が痼癪を起しBを叩く、つねる、刃物で脅す (B)
			自分の意思を持つことを否定されすべて母親の言いなりにさせられる (B)
			母親から自分の容姿や体格について嘲笑される (B)
		母親の過干渉	自分は工場勤めがしたいのに母親が今の職場を辞めてはいけないという作業所だと「障害者」という目で見られるのが母親として気になる (A)
			何をすると口を出してくる 自分一人では何もできない母親だがBが距離を置こうとすると刃物で脅す、暴力を振るう (B)
			何をすると口を出し、バイトをするにも一人暮らしをするのも反対する (C)
			結婚をし、家をでた娘を心配しすぎて泣いて過ごす (C)
		母への思い	今でも恨んでいるところはある しかし母親が自分のために一生懸命になっている姿を見ると私のために苦労をしたのだらうと思えるようになった (A)
			母のことは何をされても母親に尽くしてきたが精神的に自立した今は少しの時間を共に過ごすのささ苦痛で嫌いだ (B)
			母親は大好きだったが結婚後は一時期重く感じていたことがあり母親と距離を置いたことはあった (C)
			基本的には母親のことが大好きだった (C)

自身のことを自分で決めることができずに、毎日国際電話を数時間かけていたこともあった。Aも母親から精神的な自立ができていない可能性がある。Cは専門学校へ進学した後に、「自分の力で」と考えることがあり精神的な自立を果している。語りから明らかであるようにCが自立に目覚めてバイトを始めたときに結婚をしたときに母親が寝込むほどであった。そのことから考察すると、母親もこの時点では子離れができていないと考えられる。その行動によってCは母親から精神的な自立を果たしたが、母親が亡くなるまでCは母親と距離を置いていた。

V 総合考察

本研究では、成人のASDを持つ女性のライフサイクルと発達に関しての検討をした。

そこで見受けられた「困りごと」や「特徴」「期待される支援」について考察する。

1. 女性の自閉症スペクトラム障害の問題

女性の自閉症スペクトラムの困難という点では、個人差が見られた。Bについては性的虐待や異性からのハラスメント行為を受けている。そのことについて、当事者が虐待を受けていることを認識していない。Bは時間をかけてそれが性的虐待であったこと、セクシャルハラスメントであったことを理解している。宮尾(2015)が指摘するように、「男性が女性を誘うこと」や「異性と二人きりになること」「異性に興味を持たれること」の意味合いを理解していないことが考えられる。また、女性同士の雑談に加わることができない傾向が3名に見られた。

「すぐに群れたがる『群れ』の中では均質を求め、異質なものを排除しようとする」⁹⁾というように女性の人間関係のなかでは、共感性をもとめ、足並みをそろえることが求められる。その中でA、B、Cは女性の人間関係の中に入ることができなかったと考えられる。

2. コミュニケーションの問題

コミュニケーションに関してはA、B、Cの3名全員に、幼少のころから問題が生じていた。具体的には、「人との会話ができない」「人の会話が理解できない」であった。「会話ができない」については、年齢を重ねていくにしたがっ

て、学習して会話が可能になったケースも見られる。ここではA以外の2人にその傾向が見られた。Aは現在でも、そのことは「あまりわからない」と返答している。このことについて「基本的に彼らの会話はコピー的なのだといってよいでしょう。誰でも言葉を覚えるときはコピーから入るものです。しかしいわゆる『健常』の人たちはコピーをもとに、自分なりの感情や表現をTPOに合わせて調節しているのです。自閉症スペクトラムの人は、このTPOに合わせて調節していくことがうまくいかないのです」¹⁰⁾と内山ら(2002)は述べている。このように、会話は徐々にできるようになっても、場違いな返答になってしまったり、定型文のような返答になってしまったりするようである。BとCについても同じ傾向が見られた。

3. 学校での困りごと

学校生活の中でも全員がさまざまな困難があり、とくに、コミュニケーションの問題と勉強の問題が抽出された。3名全員が集団行動を苦手と感じており、大人になってからも苦手と感じていた。また、A、B、Cは騒がしいところが苦手という共通点が見られた。宮尾(2005)は、「においや光に敏感、聴覚の過敏性と同様に、臭覚や視覚、味覚、感触などが敏感な人もいる。また反対に鈍感な場合もある」¹¹⁾と述べる。また、原因不明の体調不良や倦怠感もA、B、Cにみられた。女性のアスペルガー症候群の特徴として、宮尾(2005)は「慢性的で重い体調不良、アスペルガーの女性には、体調不良が起こりやすいようです。とくに多いのは睡眠障害や胃腸の異常、疲労感など。それらの不調が慢性的に起こるため、薬が手放せません。」¹²⁾と指摘する。またAは「うるさい音と暑いのが苦手な我慢できなくなって癇癇を起してしまう」、Cは「疲れやすく、大きな行事(自分にとって)があると1週間から2週間ほど疲れがとれなくて寝込むことがある」と語った。疲れてしまって学校や仕事休むことになると、「自己管理ができていない」や「体が弱い」と周囲から判断されてしまうこともあり「自分に責任がある」ととらえてしまい自責の念に駆られることもあるだろう。Bも「とにかく体育とかクラブ活動、特にクラブ活動をしてまだ家で宿題が

できるなんて、みんななんて強いんだろう」と感じており、Cも「とにかく疲れてしまう」と語っている。この問題については、自分自身で体調管理をすることも重要であるが、周囲の理解も重要となってくるであろう。

4. 勉強の中での得意と不得意

B、Cは絵を描くことが好きだった。Bは小学生のころに描いた風景画が県下のコンクールに選出されたことがあった。Cは美大への進学を希望していたほど絵を描くことが好きだった。また全員が不得意な科目を体育としていた。Bは、体育の中でも短距離競争で学年代表に選ばれ、遠泳では一番泳げるクラスにいたが、跳び箱や鉄棒、グループで競技するものに関しては不得意であったと語った。「数学が苦手」「図形がわからない」がA、Cにみられた特徴であった。Bについては、数学は好きだったが不登校になってから解らなくなっていった。結果的に、大学受験で仕方なく勉強をしたが、「気持ち的に学校を休んでから苦手になった感じがする」と語った。

5. 感情の問題

感情の問題として、「人の感情がわからない」「自分の感情がわからない」「異性を好きという感情がわからない」特徴が見られた。「他人への感情への反応の不足や偏りに見られるように、社会的・感情的な相互のかかわりを持ってない」¹³⁾との指摘があるように、ASDをもつ人は他者の感情を理解することが難しい。Bは「自分の感情すらなかなか理解できない、なんか嫌だなと思ってあまりよくわからない。のちに頭で考えて、考えて、すごく嫌だ、腹が立つ」といったようなことがあり、怒る感情が人とはテンパがずれていると語った。Aについても「悲しいとか、寂しいとかあまりわからないし、何も感じない、ピンとこない」と語っている。Bは「異性から興味を持たれたり、好きとか言われたりしたら答えなければという気持ちばかりで、自分の意思がない。よくわからないし、なんとなく不快な感情」と語った。Cについては「感情がわからない」といった傾向は見られなかった。しかし、彼女たちが全く感情を感じないといったことはなく、感情を理解するには健常者とされる人々よりも時間を要し、青年期以降から中

年期にかけて、徐々に理解できるようになっている。幼少期や学童期に感情の理解が難しく、共感性に乏しいということは友達関係が築きにくいのではないかと考えられる。また、全員が青年期まで友達関係がうまく築けず苦渋に満ちていたことが今回の研究から明らかになっている。

6. 診断

ASD（もしくはアスペルガー症候群）という診断は当事者にとってどのような影響を与えたのか。ASD当事者の森口奈緒美はASDである自分自身を受け入れ、「普通にしなければ」と闘い続けることを辞めた。闘いを止めたらとたんに世界が明るくなったとしている¹⁴⁾。また、インタビュー対象者3名についても、診断されたことにより、他人と違う部分を認め、自分自身を受け入れている。診断を受けていなかったと仮定すれば、Aも現在の仕事に就いていなかったと考えられ、Bも現在の仕事に就いていなかったと考えられるであろうし、環境もまた違ったものになったであろう。Cも診断を受けたから障害者施設で介護職員として働いたことや当事者会を立ち上げることができたのではないかと考える。

7. 母親の存在

家族についてのことは特に、母親との関係性がクローズアップされている。A、Bについては、母親から虐待を受けている。Bは長期的に身体的、心理的な虐待を受けており、その虐待自体を本人が認識していないという状態であった。虐待をうけるということは、当事者にとって耐えがたいと推測されるが、なぜこのような「当事者が認識できていない」ということがおきるのか。先にも述べたが、ASDの当事者は自分の感情を感知しにくいという特徴と、身体的な痛みに対して鈍いという可能性がある。Bは虐待に対して「自分が叩かれたり、暴言をはかれたりするのは自分が悪いからだ、自分の存在がおかしいからだ」と認識して疑わなかった。虐待については、友田（2006）が、「虐待を行う親の多くが、自らも虐待を受けたことがあることが知られている」¹⁵⁾と述べている。このように、Bの母親も虐待を受けていた可能性がある。Bの母親は、その母親からの言葉の暴力や支配で自

分の自由がなかったこと、夫（Bの父）からの暴力を受けていたことが明らかになっている。Aの母親からの虐待は、母親が舅夫婦との仲が思わしくなかったことと、Aの素行が悪いのは、母親の育て方が悪いと責められた結果、Aに厳しくしてしまったのではないかと考えられる。虐待は当事者が成人になってからも精神的に影響を与え、「大きくなってからも精神的トラブルを抱えることがある」¹⁶⁾とされる。事実A、Bにもうつ病と睡眠障害になった経緯があった。

8. 支援の必要性和周囲の認識

知的に遅れのない自閉症スペクトラム障害の人々に、支援や適切なフォローは必要である。必要性やあり方はその個人によって違いはあるが、本研究で明らかになったこととして2点あげられる。ひとつめは相談機関があることが望ましいと考える。日常的な生活の支援やフォローという形は必要としていなくても、心や感情の問題で当事者にとって不可解な問題が起きた時に、専門家に相談ができることができれば救われることもあるのではないかと。現在では知的に遅れがなく、一般就労している人であると、相談できる場所は限られている。二次障害がでている状況ではなくても、日常の困りごとを相談する場所や相談を聞いてくれる存在が重要であると考え。その存在が通常であれば友人や家族などであるが、ASDでコミュニケーションの問題を抱えていると、身近に友人がいないことや家族関係が良好でない場合に孤立しやすい問題が浮かび上がる。心の相談や自分にとって不可解な感情の問題や異性問題を相談できる存在がいる機関があることが望ましい。また、臨床心理士によるカウンセリングも有効的であると考え。語ることによって自分自身を客観視することも可能であるし、共に考える相手がいるということはコミュニケーションに問題があるASDを抱える人にとって、生き辛さを軽減できるのではないだろうか。

ふたつめは環境整備である。特に女性は、感覚面の偏りに苦しんでいる（宮尾、2015）とあるように、温度に敏感であることや音に敏感であること、光などに敏感であることも考えられる。以上のことを配慮し、周囲が過ごしやすい環境をつくることが重要である。

昨今では「個性」や「多様性」が教育現場では認められるようになったが、一般社会では未開発であるとインタビューを通して明らかになった。このような「少し変わった人」がいるということを、周囲の私たちが、その存在を認めることによって、少しずつ生きやすい世の中にしていく必要があるのではないかと。その支援やニーズのあり方についてはさらなる検討が必要である。

謝辞

滋賀大学大学院教育学研究科学校教育専攻障害児教育白石恵理子教授には、本研究論文執筆にあたり、障害児教育及び自閉症スペクトラム障害に関してのひとかたならないご指導を承り感謝すると共に、大学在学中からの研究会参加での指導と、大学院の2年間のご指導、深く感謝申し上げます。そして、本研究のインタビューにご協力頂きました調査対象者様にも深く感謝申し上げます。

文末脚注

- 1) 宮尾益知 2015『女性のアスペルガー症候群』講談社 6頁。
- 2) 神尾陽子 2012『成人期の自閉症スペクトラム障害診断マニュアル』医学書院 13頁。
- 3) C・ギルバーク 田中康雄（監）森田由美（訳）2003『アスペルガー症候群がわかる本 理解と対応のためのガイドブック』明石書店 9頁。
- 4) 宮尾益知 2015『女性のアスペルガー症候群』講談社 15頁。
- 5) 神尾陽子 2012『成人期の自閉症スペクトラム障害診断マニュアル』医学書院 25頁。
- 6) 同上
- 7) 宮尾益知 2015『女性のアスペルガー症候群』講談社 86頁。
- 8) 同上 22頁。
- 9) 水島広子 2014『女子の人間関係』サンクチュアリ出版 211頁。
- 10) 内山登紀夫・水野薫・吉田友子（編）2002『高機能自閉症・アスペルガー症候群入門 正しい理解と対応のために』中央法規出版 14頁
- 11) 宮尾益知 2015『女性のアスペルガー症候群』講談社 36頁。
- 12) 同上 30頁。

- 13) クリストファー・ギルバーク・田中康雄（監）森田由美（訳）2003「アスペルガー症候群がわかる本 理解と対応のためのガイドブック」明石書店 8頁.
- 14) 森口奈緒美 2014『平行線』遠見書房 313頁.
- 15) M・H タイチャー（監）友田明美（著）2006『いやされない傷—児童虐待と傷ついていく脳』診断と治療社 6頁.
- 16) 同上 6頁.

